

はじめに

学級づくり、楽しんでいきますか。子どもと信頼し合い、また、信頼し合った学級の子どもたちの姿を目にすることは、学級担任にとって生き甲斐とも言える喜びではないでしょうか。学級みんなで一体感を感じたときが、「この仕事を選んでよかった」と思える瞬間ではありませんか。

しかし、学級づくりが「大変だ」と言われるようになって久しくなりました。そして、これに対応するために、子どもの問題行動への対応方法、子ども同士の人間関係づくりの方法、クラスをまとめる様々な活動など、たくさんの有効な方法が紹介されました。実に豊かでバラエティに富んでいます。その結果、先生たちの「引き出し」は確かに増えました。

でも一方で、「引き出し」の中身を使いこなせないという問題も出てきました。

どんなに優れた心理技法や教育技術であっても、打ち上げ花火のように単発で投げかけるだけでは、理想の学級をつくることはできないのです。目的を持って理想の実現のために使っていくことが必要です。

しかも、教師が理想の学級をどんなに立派に描いても、子どもの願いに向き合うことなく突き進んだのでは、教師のひとりよがりですら終わってしまうでしょう。子どもと一体感を持つどころか、四月に子どもと出会い、「よし、すばらしい学級をつくるぞ」と気合いを入れていろいろな取り組みをして

も、子どもがそれをよしとしていなかったら、教師と子どもの気持ちは離れるばかりです。目的地向かって子どもと一緒に旅を始めたと思っていたのに、気づいたら教師が一人旅をしていたなんてことになりかねません。教師には、子どもの願いを見て取り、自分の願いと子どもの願いの折り合いをつけながら理想を実現していく力が求められます。

では、子どもの願いとは何でしょうか。

冒頭に「学級づくりが大変だ」と述べましたが、子どもの願いを知るヒントがそこにあるように思います。学級づくりと一言で言っても、様々な側面がありますが、その最も大きなものが人間関係づくりです。学級づくりに関するセミナーや書籍の内容のほとんどが、人間関係づくりに関するものであることからそれがわかります。では、子どもの人間関係が難しくなった、子どもが互いにつながり合えなくなつたのはなぜでしょうか。これには、様々な分析があることを承知しています。しかし、ここではあえてそれに触れず、逆の問いかけをすることで考えてみたいと思います。

私たちはどんな人とつながりたいと思うのでしょうか。みなさんはいかがですか。

それは、安心できる人ではないでしょうか。相手が何者かわからないときに仲良くなるうと思う人は少ないでしょう。考え方、人柄など、相手のことがわかってきて安心できたときにつきあつていくという気持ちになります。人は安心感を持ったときに、その対象にかかわっていくことができるのではないのでしょうか。

いま、子どもの人間関係はとても不安定だと言われます。昨日はベツタリと仲のよかつた友達にバツサリと切られてしまう。そんな状況では、安心して人間関係を結ぶことはできません。考えてみれ

ば、いま子どもの生活には、不安定な要因がいくつもあるように思います。学校はとても忙しい場所になりました。一息つく間もなく、次々と行事や活動に追われる日々。じっくりと一つの物事にかかわることができず、達成感や成就感を味わうことができず、なかなか自信が持てません。では、家庭でほっとしているかというところでもなく、親も子も忙しく、ふれあう時間も少ないと言われます。人を大事にしたり大事にされたりする体験の不足。人とふれあうあたたかさを感じたり、将来への明るい展望を抱いたりできない状況。そんな子どもを取り巻く環境が、彼らの瑞々しいやる気を奪っている気がして仕方ありません。

本書では、そんな子どもたちに安心感を持たせ、子どもにとって安心感のある教室をつくるための考え方と先生のワザを紹介します。とりたてて新しいことを述べるわけではありません。むしろどの教室でも行われているありふれた教師のワザです。しかし、ちょっととした工夫をすることで、そのありふれたワザが、実は、けっこうな力を持つていることに気づくでしょう。

教育技術を最もうまく運用するコツ、それは、それを使う教師の安心なことです。教師がそのワザを、安心して、自信を持って展開する。それが大きな教育効果をもたらすのです。本書を読みながら、「やったことあるよ、これ」でも「ああ、こんな使い方があったんだ」「これならやれる」という感覚を持つていただけたらとてもうれしいです。

世の中はエコブームですが、教育技術も「使い捨てる」から「使いこなす」観点で見直してみてはいかがでしょうか。私たち教師は、実は「宝物」をたくさん持っているのです。